

1 学校教育目標
やさしさとキラッと輝く瞳をもち 学び合い高めあう心豊かな児童の育成
2 学校経営ビジョン
児童の学力を高めるため、学習習慣、生活習慣の定着とともに、豊かな心の育成をめざす。 地域と連携した教育活動を推進し、地域や保護者に信頼される学校をめざす。 学校目標具現化に向けた組織の再編をはかり、教職員の資質の向上をめざす。

3 本年度の重点目標	4 前年度の成果と課題
重点1 人とのかかわりを通してやさしさを育て、心身ともに健やかな子どもを育てる。 重点2 校内研究を推進し児童の自尊感情を育て、学力を高める。 重点3 家庭・地域との連携を図り、協力を求める。 重点4 幼保小並びに小中の連携を図る。 重点5 特別支援教育への専門的研修を深め職員の資質向上を図る。	前年度よりの課題であった「児童のやる気と自尊感情の育成」にはまだ十分とはいえないが、「響き合い、学び合いながら伸びていく心豊かな子どもの育成」を掲げた校内研究実践や全校が一斉に集中した時間を共有する「朝読書」や人権教室での学習は、この課題解決に向けた大変有効な取り組みであり、今後も是非続けていきたいと考えている。 校内研究の積み上げにより、児童の「響き合い、学び合い」が少し見え始めている。人へのやさしさは自分を大切に思う気持ちから生まれるものであることを意識づけながら実践を重ねていきたい。 学力向上を図るために掲げている学習習慣の確立については、職員の日々の取り組みはもちろん、保護者の深い理解と協力がなくてはできないものである。引き続き次年度の重点目標として掲げ保護者への効果的な働きかけ方を考えていきたい。

5 総括表						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	評価及びその理由	具体的方策	成果と課題
学校運営	学校経営方針	本年度の重点目標の周知	学校だよりの月2回発行 校内環境の整備充実を図る	A ・学校の教育目標や取り組みについては、学校便りや学級便り等で周知していた結果、児童・保護者ともにほぼ8割が「知っている」「周知されている」と感じている。	・児童の学習の様子やがんばりを保護者や校区の方々に伝える。 ・教育目標を校内に掲示し、児童、保護者、来校者にアピールする。	・保護者へのアンケートでは、「周知されている」との回答は8割を超えていたが、「知っている」と回答した保護者は7割程度に留まった。児童や保護者によりわかりやすい周知方法の工夫が必要。
	開かれた学校づくり	開かれた学校づくりの推進	・フリー参観デーを設け、保護者90%以上、地域の方々40名以上の来校をめざす。 ・学校ホームページのリニューアルを行い、広く地域や保護者へ閲覧を呼びかける。	A ・フリー参観デーはもちろん、他の授業参観日や保護者会にも大変多くの参加を得ることができた。 ・学校ホームページは完全にリニューアルはできなかったが、行事の紹介などは一部できた。	・保護者へのお便りを定期的に発行し、HPの掲載等で、来校を促す。 ・各地区回覧板を通してお便りを配布し、学校の取り組みを知らせる。	・一年を通して、大変多くの保護者に来校してもらい、子どもたちの学習の様子を参観したり、一緒に活動したりしていただいた。 ・ホームページについては完全にリニューアルがまだできていないので課題である。
	地域との連携	地域の人材活用と連携	・「祖父母に学ぶふれあい学級」や「親子で新年を祝う会」など、地域・保護者との交流を通して、地域に根ざした学校行事を推進する。	A ・「祖父母に学ぶふれあい学級」、「親子で新年を祝う会」には多くの保護者や地域の方々への参加があり、盛況であった。 ・保護者へのアンケートでも、全保護者から「学校は地域の環境は人材を生かしている」との回答が得られていた。	・ふれあい学級では、祖父母の活動希望調査をとり、40名以上の参加をえて、技と知恵を学ばせ、新年を祝う会で地域の方々とともに伝統行事の体験を通して新年のスタートとする。 ・地域人材を活用し、芸術教科の指導充実を図る。	・祖父母に学ぶふれあい学級では、たくさんの参加があったものの、内容が昨年と重なっていたり、参加者が若干少なかったりした。内容の見直しが必要。 ・「鬼火たき」「新年を祝う会」はほぼ全保護者の参加を得て盛況であったが、準備の負担も大きいので、やり方を見直す時期に来ている。
	教職員の資質向上	校内研修を通じた授業力の向上	・学級経営方針をたて、授業力のアップをめざす。 ・表現活動の中で、聴き合う関わりを通して、学び合う力を育てる。	A ・職員が評価・育成システムや学級経営を意識しながら、子どもたちの思考力、読解力を高める工夫ができた。 ・アンケートでも成果が上がったとの回答がほとんどであった。	学級経営案にそって実践を重ね、学期ごとの評価を行い軌道修正をはかる。学び合う姿をもとめ、関わり合わせ方や、教師の児童を見取る力を高める。	・校内研修については、学級経営案との繋がりを意識できる部分が少なく、研究テーマと関連づけた学級経営案も考えていく必要がある。 ・小規模校ならではの授業の工夫や複式授業の研究を進める必要がある。
教育活動	学力の向上	学習習慣の確立と学力の向上	・児童の自尊感情を高め、学習意欲を向上させる指導を行い、学力をアップさせる。 ・家庭と連携した取り組みを強め、児童の学力向上をめざす。	B ・学級担任や教科担当が各学年に応じた指導を行っているが、個人差が大きく、学力がどの子もアップしているとは言いがたい。 ・学期に1回の学びの週間、各家庭意識を持った取り組みをしてもらっているが、家庭によってはいろいろな事情で思うように協力が得られない。	・基礎基本を身につかせる時間を確保し「思考力」「読解力」を培う授業のあり方を工夫する。 ・生活ふりかえりカードを通して、家庭での学習習慣の定着を図る。	・学び合いの授業を仕組むことで、児童がお互いに関わり合いながら学ぶ姿勢を身につけている。繰り返し学習をさせることで、基礎基本の力が徐々に上がっている。 ・生活振りかえりカードでの振り返りをきっかけに、家庭の様子を見直そうとされる家庭が多く、少しずつ家庭での学習習慣が定着しつつある。
		図書館教育の充実	・全校あげて「本」に親しみ、生活の中に「読書」を定着させる。	A ・朝の読書タイムでは、まんが以外を読ませるなど、約束を決めて取り組ませた。 ・国語の教科書に掲載されている図書を参考にした「本のリスト」を児童に提示した。 ・ブックレションで配布した絵本を家庭で児童に読み聞かせさせたり、異学年で紹介しあったりする活動を行った。	週4回の読書タイムを継続する。 各学年に応じた「本のリスト」を提示し、良書に親しませ読書の量から質への向上を図る。 家庭読書の時間を設定する。	・読書意欲の低い児童への取り組みを考える。 ・家庭読書の時間を設定し、取り組みを報告してもらうなどの手立てを考える。
	心の教育	人権教育の充実	児童の人権感覚や生命の尊重を育む。 縦割り活動を通して人との関わりを学ぶ。	B ・担当教諭を中心に年間計画に沿って人権教室を行った。私たちが行動すべきことはまず、「命を大切にすること」「友だちを大切にすること」を確認した。 ・「ぼかぼかことば」「ぼかぼかアクション」「ちくちくことば」などは浸透しつつあり、「ぼかぼか」を増やしていこうという意識は高まっている。	・毎月、第4水曜日(年間6回)に「人権教室」を実施し、全校での集会や発達段階に合わせた低・中・高学年グループでの指導を行い、「ぼかぼかことば」や「ぼかぼかアクション」を推進する。 ・縦割り班活動を中心に主体的な児童会活動を推進する。	・教師や児童の意見発表などの話に真剣に聴き入り、終末の感想交流は活発に行うことができた。 ・小規模校なので、毎回全校児童を対象の集会形式が多かった。しかし、それぞれの発達段階に応じた理解を図るために、内容によっては学年集会という形を取り入れてもよいかと考えられる。

	道徳教育の充実	・生命の尊さや道徳的心情について学ばせ、道徳的実践力を養う。 ・いじめの悪に気づかせる。	A ・ふれあい道徳では、全学級で道徳の授業参観を行い、保護者とともに道徳の各テーマについて考えることができた。 ・毎月、いじめや命について考える機会を持った。	・9月の授業参観は、全学級で道徳の授業を組み、保護者とともに考えさせる。 ・毎月1日は「いじめ・命を考える日」として設定し、児童のお互いの気持ちを交流させる。	・授業参観で、生命尊重をテーマとした道徳の授業を全学級年間1回は行い、保護者も一緒に命について考える機会をもってもよいかのではないかと考えられる。
健康・体づくり	望ましい生活習慣の形成	・正しい食習慣の定着と睡眠時間の確保をめざす。	B 今の食生活習慣が将来生活習慣病にかかる可能性があり、正しい生活習慣が大切であるとほげんだよりや個別指導する。	・学校便りにより保護者への啓発活動を行う。 ・学期に1回一週間の期間を区切り、生活習慣調査を行い、意識化を図る。	体調不良者には、誘因としての指導はしているが、繰り返し家庭への啓発活動が必要。病気なく健康で長生きするにはどうしたらいいか、具体的に指導していく必要がある。
	たくましい体づくり	・体育大会での全校種目でスタンツ(組体操)に取り組み、児童の基礎体力向上につとめる。 ・水泳学習の充実を図り、児童の健康的な体づくりをめざす。 ・地域で行われる体育的な行事に積極的な参加を呼びかける。	B ・その学年に応じた技を計画的に練習し、技の習得数が増えた。 ・水泳の学習時間は、天候不良のため、目標時間数には数時間たりなかった。 ・昼の休憩時間を使って、計画的に相撲大会の練習を行ったが、大会日が社会体育の行事と重なり、参加率は低かった。	・3年から6年までの合同体育を11時間実施し、個人の能力にあった技を計画的に習得させる。 ・水泳指導時間を15時間以上設定する。 ・地域で行われる「すもう大会」「マラソン大会」の練習を計画的に実施し、参加率70%をめざす。	・技の数が多かったため、計画以上の時間数が必要であった。 ・夏季休業中の水泳教室は各クラスで行われているが全校で行うことにより細かな指導ができると考えられる。 ・地域のボランティアや体協等に連携を呼びかける。
特定課題	小学校低学年の学習環境の改善充実	基本的な生活習慣・学習習慣の育成	A ・低学年のうちに学校生活の基本的な決まりを身につけさせるために、できるだけ声をかける、見守ること続けた。 ・朝の会や帰りの会など、日々の学校生活をふりかえり、その時どきの問題をその都度指導し、理解定着を図った。	・学習指導をくり返し行う。 ・「朝の会」で一日の見通しを持たせ、「帰りの会」でふり返り(自己点検)をさせながら定着を図る。 ・学習態度に関する約束事を教室に掲示する。 ・話し合いの場面を授業の中で数多く取り入れる。	・あいさつや返事、掃除や整理整頓、時間を守る、学校生活全般の中で指導できた。 ・帰りの会では一日をふり返る時間を設け、よりしっかりと自分を見つめさせた。複式学級がスタートしたことにより、1,2年での学習の時間も増え、1学期当初は児童も戸惑うことがあったようだが慣れてくると自然に互いに馴染んでいった。学習の共通ルールを確認し学習に集中することに重点を置いて指導した。
他校種との連携	幼・保・小連携	・1年生全員を学校大好きにする。 ・保育園との交流を年間3回以上設定する。	B ・少ない人数なので、異学年との関わりも深く、全校児童が新入生を温かく見守る中で安心して学校生活を送ることができた。	・ソフトプログラム「わくわく」を活用する。 ・あらかじめ年間計画に設定しておく。	・ソフトプログラム「わくわく」は教科書と同じ挿絵などが豊富に取り入れられており、たいへん有効だった。 ・今年度は全員が違う園からの入学だったので、入学前の児童の様子が十分把握できないところがあった。入学後早い時期にそれぞれの園との情報交換を行う機会の必要性を感じた。
	小・中連携	・中学校への自然な移行ができ、いっそうの学力の向上をめざす。	B ・スムーズな中学校入学に向けての取り組みとして、中学校での富士小と合同の授業や部活動体験、本校における中学校の先生の社会科の授業、修学旅行での富士小との平和学習、3校合同の文化の集い等を行った。この取り組みが、中学への自然な移行に繋がることを望む。	・中学校校区での職員研修会を設け、「人権・同和教育」「教育相談」研修会を実施する。 ・9年間を見通した指導事項や、学習習慣を明らかにし、推進する。 ・「学習の手引き」を作成し保護者の連携に対する意識を高めてもらう。	・中学校校区での研修会では、9年間を見通したこの地区ならではの共通の課題を話し合うことができた。 ・中学校校区3校一緒に、学期に1回の「学びの習慣」を行うことで、学習習慣への意識を共有することができた。
特別支援教育	見守りたい子への支援強化	・児童一人ひとりの教育的ニーズに応じた目標を個別の指導計画に取り上げ、その目標を達成する。	B 教育的ニーズに応じた個別の指導計画についてはまだ十分とは言えないが、校内委員会で報告される児童の様子については、指導の効果が表れていると判断できる。	・職員の研修を年8回実施し、特別支援に対する職員研修の充実を図る。 ・スクールカウンセラーや巡回相談員等、専門家の意見を取り入れていく。	・校内研修については、より児童の実態に関わりの深い内容について行っていく。 ・スクールカウンセラー、巡回相談等については、更に積極的に活用していく。

6 総合評価

学校運営に関しては、概ね良好に過ごすことができた一年間であったと考える。本年度よりスタートした2,3年生の複式学級編制に伴う教育課程についても、カリキュラムが複雑になった面もあったが、混乱することなくスタートし、また途中で修正を加えながら各教科とも標準時数を確保しつつ、学校独自の行事も前年並みに盛り込み、また地域人材の活用も積極的にできた。地域の方々に支えられ、各行事にも多数参加していただけた。また、特別な教育的支援を要する児童の増加にも、毎週情報交換会を開き、担任だけでなく全ての教員が個々の児童の実態について共有し、また協力して支援に当たることができた。

また、校内研究については、前年度から積み上げにより各教科へ児童の「響き合い、学び合い」を広げていくことができた。まだ十分とは言えないが、人へのやさしさは自分を大切に思う気持ちから生まれるものであることを意識づけながら実践を重ねていきたい。

一方、家庭での読書活動や、昨年からの課題であった家庭学習習慣の確立については、学校からのアンケートや啓発が十分浸透しているとは言えないところもあり、課題として残った。

5 来年度への改善策

来年度も引き続き複式学級(3,4年生)の学級編制となるが、本年度の経験を生かしたい。少人数の良さをいかした学級経営・学校経営を目指し、児童一人一人が輝けるような学校を目指したい。また、地域人材の活用についても、さらに情報収集の強化や活躍できる場面の工夫などを通して、さらに地域に開かれた学校を目指したい。また、特別な支援を必要とする児童に対する支援についても、今年度からさらに教育相談や外部機関との連携を強化しながら、個々の児童に適切な支援を行っていきたい。

校内研究については、前年度まで取り組んできた「響き合い、学び合い」の各教科への取り組みを踏襲しつつ、さらに少人数の利点を生かした教育活動の研究へ取り組んでいきたい。

家庭での読書活動の充実や家庭学習習慣については、いずれも保護者の深い理解と協力がなくてはできないものである。引き続き次年度の重点目標として掲げ保護者への効果的な働きかけ方を考えていきたい。

は共通評価項目、 は独自評価項目